

広島大学 グローバルインターンシッププログラム
NEWSLETTER

海外インターンシッププログラム(G.ecboプログラム)
 —10年後の自分を探そう 世界と出会うインターンシップ—

第17号 Vol.10 No.1

2018年3月

目次:

インターンシッププログラムに関わって思うこと	1
世界で活躍するOB	2-3
豊富なインターンシップ経験に基づいたコメント	4
特集！派遣生の就活体験談	5-7
2017年度派遣生帰国レポート	8-11
G.ecbo 遡上教育型インターンシップとは？	11
活動報告	12

インターンシッププログラムに関わって思うこと



MAHARJAN, Keshav Lall 教授

大学院国際協力研究科運営委員
 教育文化講座講座主任
 国際連携事業委員会
 i-ECBO 部会部会長

経済学の応用分野の一つとしてとらえられる農業経済学を学ぶ小職は、人々が生活するため、第一に必要とされる食糧確保、生計維持などの問題について、その実態に即した一次資料

の収集を踏まえた実証分析に基づいた研究を推進している。人々の生計の研究において、消費に関する問題も重要な研究課題で、併せて生活が営まれる場である地域、コミュニティ・村落、そこで育まれる生活様式・文化も重視すべく、学問的関心は農業経済学から農村経済学へと広がる。農村経済学の一つの重要な研究手法として、その場・地域、つまり現地にて、全六感をもってあらゆる情報を収集することである。要するに農村・地域を理解するにはまずもって現場を知り、その重層的構造を把握することがとても重要である。これらの一次情報・資料を他の類似した情報、二次・統計資料とつぎ合わせ、客観性をもたせながら質の高い実証分析を行い、関連する問題の改善・解決策に言及することになる。この研究手法は実証分析を重視する他の多くの分野においても共通性をもつ。とりわけこの研究手法は二次資料が少ない途上国において課題解決型研究手法として非常に注目されている。

国際協力研究科でインターンシッププログラムに関わってからかれこれ10年になる。実は、農村経済学の研究、地域研究、インターンシップは、「現場を大事にし、現場から多くを学び、その知識を色々な場面で活用し、物事の本質を理解し、改善・解決策を見出す」という点では全く同じであると感じている次第である。このことを今後とも自分の教育研究及びインターンシップに参加する学生の育成に活用したい。



G.ecboオリエンテーションの様子

現役学生の就活特集は5ページへ！！

活動予定 2018年度前期
 /Spring 2018 G.ecbo
 Schedule

- ◆4月初旬/Early April:
G.ecbo Day(募集説明会)/
G.ecbo Application Guidance
- ◆4月17日/April 17:
応募締切/Application Due
- ◆4月下旬/Late April:
選考及び発表/
Selection & Notification
- ◆5月中旬/Mid May:
事前研修開始/
Commencement of
Pre-internship Training
- ◆7月中旬/Mid July:
インターンシップ開始/
Departure to internship

Global Internship Program



G.ecbo海外インターンシッププログラムとは？

グローバルインターンシップを核としたサンドウィッチ教育を通して、既存の学問領域に縛られない多様な分野の課題に適応できる研究者の輩出、国際協力・国際援助の第一線をリードする実務者の養成と、世界中から集まる留学生や研修生の高度専門職業人としての育成を目指します。

世界へ！活躍するOB

大窪 香織 -独立行政法人国際協力機構(JICA)
(2006年度 アルメック(ベトナム)派遣)

【経歴】

2005年 e-ECBO(工学研究科専門ECBO)に参加^(*)。タイ(SATAKE Thailand Co., Ltd.)にてインターンシップ。
2006年 i-ECBO(国際協力研究科専門ECBO)に参加。ベトナム(ALMEC(現株アルメックVPI))にてインターンシップ。

国際協力機構(JICA)入構。農村開発部、シリア事務所、青年海外協力隊事務局、経済基盤開発部、国土交通省出向、人事部、資金協力業務部と2度の産育休を経て、2018年1月よりカンボジア事務所に赴任。

カンボジア事務所ではインフラ総括、円借款総括、港湾、鉱業を担当。2人の息子(3歳、1歳)を帯同しての母子赴任。



2006年アルメックインターン中の写真

柔らかな光が差し込む大きな会議室で、政府高官の国づくりのビジョンを聞きながら、骨格となるインフラをいつ、どのように作るか、相手国の考えを引き出したり、提案したりと議論を深めています。この風景はどこかで見たことがある、と思い巡らせたどり着くのは、10年前。ベトナムの首都ハノイの都市開発プロジェクトに、ECBOインターン生として参加した夏。その時はインターンシップ学生として、見学する役でしたが、今回はその議論を主導する役として、目を大きく見開き、熱気で頬を赤らめながら、前かがみに話す私がいまいます。

私は今、国際協力の前線、現地事務所勤務しています。担当はインフラ分野。開発途上国の「こうなりたい」、「叶えたい」の夢に伴走する国際協力プロデューサーの仕事、その中でも、相手との距離が近い分、もっとも面白く、熱く、ワクワクする現場です。十数年前までぼんやりと思い描く程度だった「夢」が、インターンシップで「夢」の世界にいる人たちに直接会い、多くの時間を共にすることで、現実世界としてリアルに「思い描く」ことができ、いつか夢は「目標」になって、気がつくと、それは当然の流れの中で目の前にいる「自分」になっていました。“If you can dream it, you can do it (夢見ることができればそれは実現できる)”と言ったのはウォルト・ディズニーですが、私自身も、願い、そしてリアルに思い描くことで未来は開ける、と強く感じています。

学生時代、勉強に部活、趣味や旅行、アルバイトにと、とても忙しい時間を過ごしていることと思います。自分のComfort Zoneから抜け出してチャレンジすること、10年後の自分のなりたい姿を探し、自分に向き合い、夢を思い描くことは、将来への大きな投資になると思います。ぜひ、自分のための投資の時間を確保して、明るい未来を切り開いてください。

^(*) e-ECBO (Engineer to Cross BOrders/国境を越えるエンジニア教育プログラム) は、当初、国際研・工学研の共同事業として実施

高松 森一郎 -学校法人太田国際学院 ぐんま国際アカデミー
(2007年度 フィリピン大学国立理数科教育開発研究所(フィリピン)派遣)

【経歴】

2007年 i-ECBO(国際協力研究科専門ECBO)に参加。フィリピン(UP NISMED)にてインターンシップ。

2010年 G.ecbo 遡上教育型インターンシップに参加。フィリピン(UP NISMED)にてインターンシップ。

群馬県の太田市にある、「ぐんま国際アカデミー」という私立の学校で教員をしています。本校は小中高の12年間一貫教育を英語イマージョン教育で実施しており、その中で私は高校の国際バカロレア・ディプロマプログラム(IBDP)の化学と中学理科を英語で担当しています。また今年度は第9学年の主任を担うとともに、国際教養部とボランティア委員会の顧問をしています。私事では2児の父となりました(妻は外国人)。

— インターンシップから現在までを振り返って。一言で表すとしたら？

「自問自答・日々挑戦」。インターンシップ当時は「開発途上国における理解教育開発分野での国際協力」が研究や活動の中心で、「国際協力や理科教育とはどうあるべきか」について、そのヒントを日々探していました。現在は、世界的にもユニークな学校環境の中で、毎日の授業や各学校行事で「より意味のある形は」、「より面白いやり方は」と模索、挑戦、反省を繰り返しています。

— G.ecboでの経験が活かされたと思われた場面

G.ecboでは、「開発途上国の教育開発の現場を知る・体験する」ことを主目的としてフィリピンに滞在しました。教員の文化や考え方に違いを感じ、その場で先生方と議論をした経験は、いまの職場で様々な国の出身の同僚と異なる価値観で「日本の教育」に携わるにあたり、日々の相互理解(主張・許容の仕方や度合い)に活かされています。

— 自分の中に残り根付いていると感じるもの、さらに発展していると感じるもの&アドバイス

G.ecboの関係でフィリピンとケニアを訪れた際、「日本が教育協力を行ってきた国で、自分はその現場にいる」という認識がありました。しかし本校赴任時、文部科学省が推進している国際バカロレアの理科を引っ張っているのがフィリピンとケニア出身の先生であることを知り、そこに異なる国際協力を見ました。日本人の一教員としてだけではなく、世界の一教員として、他国の先生と学校内外でどのように教育で世界に貢献していくか、自分なりの国際協力を追求していきます。就活へのアドバイスはできませんが、「働く上での優先順位は何なのか」、「仕事のどこにこだわりを持つのか」を考え続けることで、機会は自ずとやってくるのだと思います。その時にそのチャンスをものにするため、様々な自己研鑽を日々重ねていきたいと思っています。

国際協力へ



メインカウンターパート公共事業運輸省にて

グローバル教育へ



第24回アジア・太平洋地域宇宙機関会議
国際水ロケット大会日本代表生徒引率時
(インド、バンガロールの国際会議場にて)

村山 直輝 -株式会社オリエンタルコンサルタンツグローバル
(2008年度 アルメック(ベトナム)派遣)

企業へ

【経歴】

2008年 G.ecboに参加。ベトナム (ALMEC(現株アルメックVPI)) にてインターンシップ。
オリエンタルコンサルタンツグローバル入社(2014年に分社化)。
主な出張国はスリランカ、インド、バングラデッシュ、インドネシア、ベトナム、ミャンマー、タイ、エジプト、アメリカ、韓国など。
2017年 3月よりコンゴ民主共和国の都市交通マスタープラン案件に従事中。



昼食中の写真(左から二人目が筆者)

私はOriental Consultants Globalという海外専門の開発コンサルタントに勤めており、入社後はアジアやアフリカ、中東などの10数か国で都市/交通計画にかかわる業務を担当してきました。現在はコンゴ民主共和国に出張中のため、このNewsletterはアフリカで書いています。文字数の制約で紹介出来ないのが残念ですが、予想の斜め上から降ってくるイベントが頻繁に発生するので、一日一日をととても刺激的に過ごしています。

ー インターンシップから現在までを振り返って。一言で表すとしたら？

『行って良かった』です。私の場合、G.ecboで出逢えた人やベトナムで経験したことが動機となって開発業界に就職することを決めました。もし参加していなければ、今とは全く違う業界に就職していたのは間違いないのですが、今の仕事が充実しているので、振り返ってみると『行って良かった』と思います。



コンゴ民主共和国でのワークショップの様子

ー 自分の中に残り根付いていると感じるもの&アドバイス

ベトナムの現地調査や現地での生活の中で学んだ「なんとかする能力」が一番大きいと思います。当時を振り返ると、ベトナム語は話せないし、英語も苦手だったので、些細な問題にも悪戦苦闘しつつ遮二無二にぶつかりました。そして、問題から逃げずに頑張れば大抵のことはなんとかなります。就職してから色々な国の業務に従事しましたが、戦う舞台が変わって問題が変わっても、意外となんとかなっています。



インターンシップ関連の修士論文

今年度、本プログラム参加者15名が、大学院を修了しました(9月修了4名、3月修了11名)。
そのうち10名が、インターンシップの成果のもとに修士論文・博士論文をまとめました。

2017.9修了	国際協力研究科 Mohd Azuan Bin Zakaria	Energy-saving strategies for modern houses in Malaysia : Energy-savings modifications through passive cooling for urban houses in hot-humid climate of Malaysia
2017.9修了	生物圏科学研究科 Ayu Lana Nafisyah	Microphytobenthos florae on mangrove sediment in the East Java coastal area, Indonesia : Their ecological and physiological characters
2017.9修了	国際協力研究科 Venephet Philathong	Unexploded Ordnance (UXO) and Sustainable Development Goals (SDGs) : Estimating the impact of UXO clearance on Household Arable Land.
2018.3修了	国際協力研究科 Muhammad Nur Fajri Alfata	Fundamental Study on Indoor Thermal Environments in High-Rise Apartments in Hot-Humid Climate of Indonesia
2018.3修了	国際協力研究科 Maskey Bijan	Municipal solid waste management in Nepal: A case study of Gorkha municipality
2018.3修了	先端物質科学研究科 日比野 啓人	量子ダイナミクスの関係に基づいた量子コヒーレンスの導出
2018.3修了	国際協力研究科 張 永鳳	Chinese University Students' Intercultural Sensitivity: A Case Study of Universities in Shandong Province
2018.3修了	国際協力研究科 恵良 友三郎	コメディ動画がネパール農村部の人々の利他性に与える短期的影響
2018.3修了	国際協力研究科 金尾 太樹	Full-Scale Experiments of Energy-Saving Modification for Existing Urban Houses in Malaysia: Modification for Partial Air-Conditioning Strategy
2018.3修了	国際協力研究科 松井 理恵	滞日ムスリム児童の教育支援に関する研究ー東広島市小学校でのエスノグラフィーからー



3つのインターンシップに参加しました！！



2017年カーブがリーグ優勝を決める1週間前

豊富なインターンシップ経験に基づいたコメント

博士課程前期入学

Bljan MASKEY (国際協力研究科 教育文化専攻)

海外インターン

【インターンシップ参加歴】

修士論文執筆

2014年2月-3月 i-ECBO (国際協力研究科専門ECBO)プログラム (46日間)

派遣先: フィリピン・ICLEI-Local Governments for Sustainability Southeast Asia Secretariat

博士課程後期進学

海外・遡上インターン

2016年2月-3月 G.ecbo遡上教育型インターンシッププログラム (56日間)

派遣先: ネパール・Solid Waste Management Technical Support Center (SWMTSC)

国内長期インターン

就職活動

2017年1月-3月 未来を拓く地方協奏プラットフォーム(HIRAKU)長期インターンシッププログラム (59日間)

派遣先: 日本・西川ゴム工業株式会社

博士論文執筆

博士課程修了

2018年4月 西川ゴム工業株式会社就職予定



[i-ECBO] ICLEI-SEASのスタッフ達と



[i-ECBO] Quezon市でインタビュー中

私はこれまで2回のG.ecbo海外インターンシッププログラムに参加しました。1回目は、2014年の修士一年生の時にフィリピンにある“ICLEI-Local Governments for Sustainability Southeast Asia Secretariat (ICLEI SEAS)”でインターンシップを行いました。修士論文のテーマは『フィリピンにおける固形廃棄物管理政策と実践』でしたので、政府側と市民側の立場やその時の状況を詳しく研究したかったです。この長期のインターンシップの機会を利用し、修士論文のための調査を行いました。ICLEIは自治体とプロジェクトや活動を行なっているため、調査では多くのサポートを受けることができました。ICLEIの方々との個人的な関係を作ることができ、現在も連絡を取っています。

2回目はG.ecbo遡上教育型インターンシップでした。ネパールにある“Solid Waste Management Technical Support Center (SWMTSC)”で、2016年2月からインターンシップを行いました。博士課程後期では2015年にネパールにおける廃棄物管理について研究調査を行いましたが、その時まで調査できていなかったテーマの研究のためにインターンシップに参加しました。SWMTSCは政府機関であり、ネパールにおける廃棄物管理について色んなことを学ぶことができました。このインターンシップの調査結果を元に、博士論文の1つの章を書くことができました。

G.ecboインターンシップに参加した主な理由は、学位論文のテーマのために研究し、どのように組織が廃棄物管理に関する活動を行なっているかについて、実践的に勉強したかったからです。また、帰国後は自分のインターンシップ経験を生かし、G.ecboのRAとして、インターンシップに参加する学生にインターンシップについてのガイダンスや事前研修で指導を行いました。

国際協力研究科の学生だからこそ、海外と繋がりのある仕事をしたかったです。また、日本で働きたいという強い気持ちがありましたので、まず日本の企業でインターンシップをしたいと思います。自分が希望しているような仕事ができるかどうか、日本で働くために日本語能力が足りるかどうか、日本のワークカルチャーに適應できるかどうかなど、不安がありました。そのため、広島大学の未来を拓く地方協奏プラットフォーム長期インターンシッププログラムに参加し西川ゴム工業株式会社で2017年1月からインターンシップをしました。西川ゴム工業で自分が希望しているような仕事ができ、是非働きたかったので就職活動をしました。その結果、内定をもらい、2018年4月から働く予定になっています。

あっという間の5年間でしたがインターンシップに参加したことで卒論のために調査することはもちろん、就職にも役に立ったと思います。その上、大学で学ぶことができない世界的な、社会的な色々実践的な経験ができたと思います。G.ecboプログラムの方々、未来を拓く地方協奏プラットフォーム長期インターンシップの方々、先生方、インターンシップ先の方々には感謝の気持ちで一杯です。



[G.ecbo遡上] 家庭コンポスト研究中



ICLEI SEAS のRegional Directorと日本で再会(2017年3月2日)

就職活動体験記

日比野 啓人 (先端物質科学研究科 量子物質科学専攻)

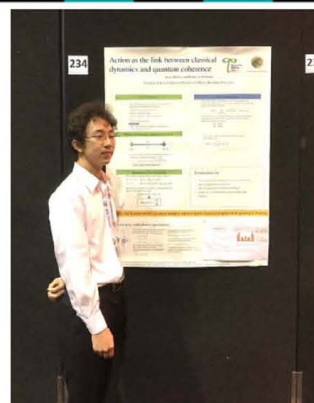
エネルギー/火力発電 内定

派遣先: グリフィス大学 量子動力学研究センター, オーストラリア

(2016年 10月~12月)

私は、平成28年度のG.ecboインターンシップの一環でオーストラリアのグリフィス大学量子動力学研究センターに留学を行いました。こちらの研修先は量子力学という分野について、世界中から研究者が集まり様々な角度から研究を行っています。私は、研修を通して私が現在行っている研究について紹介するとともに、研究に新しい視点を取り入れることを目的にこのプログラムに参加しました。

研修中は、センター長でもあるHoward Wiseman教授の研究グループに入り毎週のミーティングへ参加したり授業を受講したりしました。ミーティングや研究者の方と話すことで、新しい研究についての論文や有名な論文を紹介していただくことができ、自身の研究に対する知識の幅を広げることができました。また、研修の最後には国際学会であるAPPC-AIPに参加し、ポスター発表を行って自分の研究を紹介するとともに、ノーベル物理学賞を受賞された梶田隆章教授をはじめとした様々な分野の方々のお話を聞くことができました。



国際学会APPC-AIPでのポスター発表風景



ブリスベン中心部



研究風景



寮でのうどん作り (※写真は本人ではありません)

この研修を終えた数ヶ月後に就職活動を行い、無事に発電所の建設を行っている企業に内定を頂くことができました。内定先や就職活動を行った対象企業はインフラ系のメーカーばかりで現在の研究とは関連のない企業でしたが、人々の生活に影響を与えられるような仕事をしたいと考え、就職活動を行いました。

このような考えを持つようになった背景には、研修中に会った人々との交流ももちろんあります。丁度私が研修を行っていた期間中にアメリカでの大統領選があり、この結果については、世界中の人が驚きましたがそれだけに研究センターや寮でも話す機会がありました。彼らの出身地は日本のような比較的安定している国だけでなく、いまだ治安や経済的な安定のない国もありました。また寮が一緒だった方は経済の研究をされている方でその観点でのお話も聞くことができ、刺激を受けることができました。

就職活動中もこの研修について話をする機会もありましたが、研究についての姿勢や異分野異文化の人々と話してきたことで培われたコミュニケーション能力や対応力、行動力のようなものを評価していただいたように感じます。海外への留学は一般的になってきていますが、就職活動中はTOEICの点数などで測れる語学力のようなわかりやすいものよりも、そこでどれだけ日本で得られ難い経験をし、どう考え、どう行動したかということが重要視されていると思います。これからインターンシップに参加される方は、そのインターンシップの目的である研究活動やコミュニケーションに欠かせない語学力の向上はもちろんですが、その場でしかできない事やそこでしか出会えない人との出会いを大切に、ぜひ体験談の一つとしてもらえればと思います。

最後になりますが、グリフィス大学の皆様、広島大学での担当教員であるホフマン准教授と飯沼助教授、インターンのお世話をいただいたG.ecbo/i-ECBO事務局の方々に感謝申し上げます。

— インターンシップ前の事前準備について

渡航前には、研修準備として国際協力研究科でグループ討論の授業(能力開発特論)を受けました。この授業では、研究科に在籍する留学生と共に討論テーマについて調べ準備をし、討論を行いました。この授業を通して、英語でのプレゼンテーションや証拠を示しながら主張を行う討論の仕方を学ぶことができ、また国民性の違いを受け入れてグループワークをする難しさを知ることができました。

就職活動体験記

恵良 友三郎 (国際協力研究科 開発科学専攻)

総合家電大手 内定

派遣先: AEPC(ネパール環境局), ネパール(2016年 12月 ~ 2017年 1月)

— この企業・業界を選んだ理由

日本企業の中でも5本の指に入るほど、海外駐在員数が多いため、海外で働くチャンスが多いのではないかと考えたためです。

— インターンシップ経験が就職活動に与えた影響

一言で言うと自信がつかます。就活中は、欧米などへの留学経験者にかなりの確率で会います。彼らの多くは半年や1年の留学経験者ですが、そのほとんどが語学力の向上を目的としたものなので、G.ecboのような過酷な体験はしていません。返信の来ないインターン先の人に執拗に返信を迫ったり、調査のために電気がない村に二週間寝泊り等はしていないんです。このような、いわゆる「泥臭い」経験は、他の就活生との差になります。就活において、この経験は武器になります。

— 今後の目標

自分のいる環境を最大限に活用したいです。会えた人との出会いを大事にして、自分自身が楽しみながら働けるようになりたいです。

— 後輩へのアドバイス

就活中はとりあえず動いて、納得してください！自分も、あまり興味はありませんでしたが不動産会社の説明会にわざわざ足を運びに行って、「やっぱりここは違うな」と納得できました。この、「やっぱりここは違うな」と実際に思うことが大事だと思います。説明会に行かなければ、今も「不動産会社受けとけばよかった」と悶々と思っているかもしれません。このような悶々を少しでも取り払いながら後悔のない、納得できる就職ができることを願っております！



派遣先: AEPC(ネパール環境局)

— 調査内容について

研究テーマが「コメディ動画が人の態度に与える影響」でした。ネパールの首都カトマンズからバスで5時間ほど離れた農村部で、コメディ動画を使った実験ゲームを行い、現地の人々の利他性(相手を思いやる気持ち)を測りました。今後は集めたデータを統計学的に解析して、コメディ動画と利他性の関連性を見つけ出す予定です。

— 印象に残っていること

文化です。例えばカースト制度が挙げられます。ネパールには古くからカースト制度があり、その文化は現在も根強く残っています。カーストなんて一昔前の話だろ、と渡航前は思っていたのですが、現地に行き、「俺はカーストの都合で酒が飲めないんだ」と言う人に会うと、その制度が今も続いていることに衝撃を受けました。

— インターンシップで一番得たもの

事前準備の重要性を理解できたことです。このインターンに採用されれば、それが初めての海外インターンとなる人が多いと思います。その際、一番頼るべきは担当教員の先生です。海外経験も豊富な先生方は、自分が思いつかないようなありがたいアドバイスを幾つもくださいます。先生が忙しそうでも、遠慮せずにどんどん聞きまくってください(もちろん最小限の配慮は忘れずに)。

— G.ecboプログラムへ参加する後輩へのメッセージ

インターンといっても、行ったら何か仕事がある、という状態ではありません。自分で、自分の課題を解決するためにひたすら動き回る。課題解決のため、派遣機関のスタッフさんや、指導教員の先生、その機関に行ったことのある先輩からお話を聞きまくり自分で計画を立てる、ということが、実はこのインターンの肝になっているのかな、と思います。インターンが始まった頃、実はこの段階でもうインターンの半分は終わっているのではないかと、そういう想いで準備を頑張ってください。



就職活動体験記

金尾 太樹 (国際協力研究科 開発科学専攻)

航空/建設 内定

派遣先: マレーシア工科大学スルタンイスカンダー研究所, マレーシア

(2016年 9月~ 11月)



ー この企業・業界を選んだ理由

以前から海外に興味があり、現在は建築を学んでいるので、その2点が重なる業界は空港であると考えました。その中でも、国際空港は提携している海外の空港で働ける機会があるため、この会社を志望しました。自分の個性を活かして、日本を支えるより良い空港づくりに携われるようになりたいです。

ー インターンシップで一番得たもの・就活に与えた影響

柔軟な対応力を得られたと思います。様々な要因で計画通りに進まないことがありましたが、工夫をすることで切り抜けることができました。技術職の選考の中で、このインターンでの海外経験をアピール出来たのは他の学生との差別化につながり、自分の個性を確立させてくれたと思います。



ミーティングの様子

ー G後輩への就活アドバイス

日本には空港運営会社が数社しかないため、就職活動時は納得できる結果が得られるのか非常に不安でした。このような思いをしないためには、当たり前ですが多くの業界、企業に興味を持ち、選択肢を広げることが大切だと思いました。それが難しい場合は、自分の個性を磨くために、色々な経験や資格取得に時間を充てるべきです。その動機と、得られたことを今後はどう活かすかを的確に伝えることが出来ると、良い結果に繋がれると思います。

ー G.ecboプログラムへ参加する後輩へのアドバイス

このインターンで得られるのは海外経験が最も大きいかもしれませんが、現地に行くまでのステップからも得られることは多いと思います。派遣先との事前のやり取りや、現地での予定など、全て自分で行う必要があります。誰に何を尋ねるべきなのか、予め把握しておくことが大切です。また、現地では分からないことだらけなので、遠慮せずに助けを求めるといいと思います。大変なことも多いですが、その分得られることも多いので、諦めずに頑張ってください。

張 永鳳 ZHANG, Youngfeng (国際協力研究科 教育文化専攻)

総合ITサービス 内定

派遣先: フロリダ州立大学, アメリカ合衆国(2016年 8月~ 9月)



ー 日本で就職しようと思った理由・この企業・業界を選んだ理由

日本を拠点としグローバルに働きたいと考えていたため、日本にある外資系企業を選んで就活しました。また、新卒で入社すると、新人研修の内容が豊富でゼロから学ぶことができ、自分へのチャレンジとして良いと思ったからです。

ー 留学生という立場で就活する上でメリットになった点・またデメリットだと感じた点

正直なところ、留学生として就活をした実感はありません。留学生向けの特別採用じゃなく、日本人学生と同じウェブテストやグループディスカッション、面接を全て平等にうけました。あえてメリットをあげるとすれば、日本人学生とのバックグラウンドの違いから、面接官が興味を持ってくれる場合があることです。デメリットとしては、ウェブテストで国語や日本史、文学知識などに時間が掛かるため、勉強しないといけないことだと思います。

ー インターンシップで得たもの・就活に与えた影響

英語力とプレゼンテーション能力の向上です。英語による会社説明会であっても問題なく、グループディスカッションも堂々と発表できました。面接の自己紹介スライドにG.ecboでの経験を加えたことで、良い自己PRになったと思います。面接官も聞きながら聞いていました。また、自分にもっと自信を持てるようになりました。

ー 後輩へのアドバイス

G.ecboを終えて、後悔する学生は一人もいないと思います。是非、若いうちに世界を見に行きましょう。経験が人を大きくするから。インターンシップでは、様々な人に出会い、色々な経験をしますが、自分でよく考え乗り越えることで成長できると思います。また、就活をする上で、自己分析は非常に重要な部分だとされていますが、慣れている環境から離れると自分のことを考えるようになります。現地へは一人で行きましたが、世界各地に飛んでいたG.ecboの同期とも情報を交換しながら過ごしていたので、心強い毎日でした。自分を大きくするチャンスを逃さないように。誰でも自分が思うよりできる人です。

2017年度 帰国レポート / Internship Report

池野 康太 Kota IKENO (教育学研究科)

Host	韓国教員大学校 (韓国)
Period	2017年 8月 9日 - 9月 1日
Objectives	高校生の研究倫理意識に影響を与える要因の日韓比較(生徒と教師の認識調査), 韓国科学現場教育学会での発表



日本では、次期学習指導要領で高校生が科学的な探究活動を行う時間が定められることが検討されている。そこで、韓国教員大学の李智源先生とともに、日本と韓国の高校生の探究活動における研究倫理の認識の調査を行った。インターンシップの前には、日本の高等学校で教師と生徒の調査を行い、インターンシップ中は韓国の科学高校の教師と生徒を対象に調査を行った。その結果、日本と韓国における高校生の研究倫理の認識について、いくつかの要因を得ることが出来た。また、派遣先大学の研究室のメンバーと共に出てきた要因について議論を深めた。日本での調査の一部は、韓国科学現場教育学会にてポスター発表を行ったところ、何人かの先生から興味を示していただきアドバイスをいただいた。今後はこれらの要因をもとに質問紙を作成し、日本と韓国でそれぞれ量的調査を行い、分析・比較していく予定である。このインターンシップを通して、実際に韓国の科学高校を訪れることで自身の研究に対するモチベーションを高めることができた。また、李先生をはじめとした研究室のメンバーと過ごすことで、研究に対する向き合い方や、考え方にも前向きな変化がおきた。研究以外にも、学会において韓国の理科教師の実践を聞いたり、韓国国内の博物館を巡ることができたりと理科教師として学ぶことができた。このインターンシップでの経験を機に、さらに研究者として、理科教師として、学び、成長していきたい。

曾原 葵 Aoi SOHARA (文学研究科)

Host	インドネシア教育大学 (インドネシア)
Period	2017年 9月 2日 - 9月 30日
Objectives	TAとして日本の歴史や文化に関する講義を行い、自らの授業力を高め、歴史認識や自国に対する意識を捉えなおす



授業をしてみて、日本固有の歴史用語をどのように学生に説明するかということに大変苦労した。私が研究している私塾もそのいい例の一つであり、インドネシアにはこのような教育機関は存在しない。「今でいう～」と説明したり、江戸期や明治期にかかれた私塾の様子の絵図を見せながらイメージしやすいように工夫した。また、日本語がかなりできる学生もいるが、やはり話すスピードや語彙には気を遣わないと理解してもらえない部分も多々あったので、どうしたら伝わるのかを考え実践するよい機会となった。ここで得た力は将来必ず役に立つと思う。このプログラムに参加するまで外国人に対する苦手意識のようなものがあり、また、自分が日本史専攻ということもあり、外国語学習や海外留学をしたいという意識は弱かったように思うが、インドネシアで異なる文化にふれ、人々と交流していくなかで、日本史専攻だからこそ日本のことを色々な人に知ってもらいたいと思った。国際化が進んでいくなかで、外国人と交流する機会も増えていこう。将来、日本史を教えることになったら、インドネシアでの経験を必ず伝えたい、教育の現場から日本と世界の橋渡しがしたい、教師になりたいという気持ちがますます深まった。「やらずに後悔するより、やってから後悔」。今回のインドネシアの研修にも挑戦してよかったと思う。行かなかったらきっと後悔していた。一步を踏み出すことは怖いことだが、結果はどうあれ必ず得るものはある。改めてそのことに気付かせてくれた研修であった。

Phyu Phyu Zaw (国際協力研究科)

Host	フロリダ州立大学 (アメリカ合衆国)
Period	2017年 8月 18日 - 9月 25日
Objectives	to participate in 2017 PIE Teaching Conference and TA Orientation, to broaden my research outlook and to gain some insight on US higher education system.



The internship opportunity has shifted my perspectives, and brought about a brighter outlook on academic learning and cultural difference. The experience was highly inspirational, and it has, to some extent, developed me academically, professionally and socially. I got the chance to participate in PIE Teaching Conference and TA Orientation, to observe the transitional training programs which support students and faculty members to be able to change from Blackboard to Canvas Learning Management System, to shadow the classes of a teaching assistant in the College of Education, and attend the doctoral seminars and undergraduate classes in the College of Business, and to participate in one of the Fall 2017 PIE Coffee Hour and Teaching Workshop Series. One of the most interesting things was that I witnessed the alteration from one instructional site to another. Florida State University has chosen Canvas as a replacement to its almost 20-year-old Blackboard. FSU Canvas transition team claims that Canvas retains most of the Blackboard functionalities while offering additional and more user-friendly features. Moreover, through the doctoral seminars in the College of Business, I gained some new ideas for modifying the conceptual framework of my current research. As far as possible, I will try to utilize the knowledge and skills gained through this internship for my future career development.

2017年度 帰国レポート / Internship Report

大島 梓 Azusa OSHIMA (国際協力研究科)

Host	特定非営利活動法人IMAGINUS・インド事務所 (インド)
Period	2017年 8月 8日 - 9月 30日
Objectives	人身取引が取り巻く環境下における児童保護の在り方及びNGOの運営について学ぶ、スタディツアー 補佐



スタディツアーのテーマは「紅茶農園におけるソーシャルビジネス案の提案」であった。インターンとして、主にインタビュー時の英語から日本語への通訳サポート等を行った。自身の研究では、「人身取引問題におけるコミュニティの結束力と脆弱性」をテーマに、紅茶農園、スラム等でインタビューを行った。私は将来、人身取引問題に取り組むNGOで働きたいと考えている。このインターンシップを通じて実際にNGOで働く経験ができたのは、将来のキャリアプランの参考になった。読んでいた世界が目の前にあることに感動し、さらに、現場で感じ考えたことをすぐに現場で試し、調査という形で深めることができ、モチベーションが向上した。NGOで仕事をするやりがいを感じた一方で、政情や文化に影響されてプロジェクトが上手く回らない難しさも同時に感じた。まさに「百聞は一見にしかず」で、インドより帰国してからは、論文や書籍を読んでいるときのイメージの具体性が圧倒的に違っている。研究に関しては、早い時期からフィールドに入り、調査を行うことが最善の方法だと実感した。また、自分を支えてくれる人の大切さを再認識した。私はインド自体が初めてだった上に、海外インターンシップも、研究調査も始めてだった。派遣前から派遣中まで様々な困難があったが、私一人では乗り越えられなかったと思う。その人たちへの感謝の気持ちを忘れず、この経験を今後の研究やキャリアに活かしていきたい。

伊東 将斗 Masato ITO (国際協力研究科)

Host	UNNATI Organization for Development Education (インド)
Period	2017年 9月 13日 - 11月 1日
Objectives	地震の復興調査やUNNATIの組織運営やプロジェクトの運営方法、現地の防災プログラムに関する資料及び情報収集



UNNATIが発足してから現在に至るまでの変遷について、聞き取り調査をした。ディレクターが研究者として有名人であるためか、政府や協力体制にあるNGOの関係者が本部を訪れていることが度々あった。そういった方々を紹介していただき、広島大学の宣伝やフィールド調査用質問表の作成、修正を行った。また、ディレクターと一緒に会議に出席する機会が何度かあり、その過程で広島大学と交流を持っていた機関を訪れる機会もあった。これまでのUNNATIの活動や2001年に現地で発生した地震の復興調査・資料収集に付随して、過去に行われた質問表をデータ化する作業を体験した。ここで初めてグジャラート語に触れたことで、後の質問表に役立てることが出来た。フィールド調査では英語やヒンディー語を話せない人、グジャラート語でも文字を読めない人が多く、サポーターが現地の人々との会話を通じて質問表を埋める方法で調査を行った。また、支部近辺に位置する公立学校(恐らく小学校)では、教員から聞き取り調査を行った。周辺地域の避難所として機能するほか、避難訓練を地域を主導して行っており、学内の設備には防災設備や拡声器、防犯カメラやWi-Fiなど、電子機器という点では支部以上の設備を備えていたことが印象に残った。質問表を用いた調査の結果として、支部周辺の4つコミュニティから24の回答を得て、現地での防災技術や脆弱性への理解を深める良い機会となった。最後に、今後の課題として、否応なしに自分と向き合うことの必要性をインターンシップを通して分かった。

Soe Ko Ko (国際協力研究科)

Host	フロリダ州立大学 (アメリカ合衆国)
Period	2017年 8月 18日 - 9月 25日
Objectives	To participate in and attend the Program for Instructional Excellence (PIE) conference, related workshops, and class observation, To learn the role of TA's work in College of Education and College of Engineering, FSU



The main objective was to participate Program for Instructional Excellence also known as PIE conference and to attend related workshops. PIE is a university-wide program that provides and assists the graduate students to become not only Teaching Assistant (TA) but also future career as an instructor in university. Professors, former PIE associate, and staffs from each department explained the role of TA, disciplines, and so on. The student who did not participate in this program will not be eligible to work as TA in FSU. I went both College of Education and College of Engineering to observe the classrooms and laboratories to learn the role of TAs from each College. For College of Education, TAs, also called instructors, must teach instead of professor and the syllabus and curriculums are developed by professors. There are three kinds of TAs at College of Engineering; Instructor, Grader TA, and Lab TA. All graduate students must become TA, especially Ph.D. students. It was quite different with TAs from College of Education. Their responsibility was to demonstrate how to install and run the machines and test the students both written and oral. This program and TA system are very useful for the students who want to become a teacher in university. As a teacher, I was very impressed and I gained a lot of ideas on how to conduct this kind of program in my own country, Myanmar.

2017年度 帰国レポート / Internship Report

何 妨容 HE, Fangrong (国際協力研究科)

Host	カンボジアメコン大学日本語ビジネス学科 (カンボジア)
Period	2017年 10月 17日 - 12月 23日
Objectives	日本語を学ぶ学生に日本語や学習法に関する授業を行い、カンボジアにおける高齢者福祉に関する調査を実施



カンボジアメコン大学に到着し、まずは学生達に親しみ仲良くなることに努めた。料理を一緒に作ったり買い物をしたり、交流を通してクメール語を教わり、同時に彼らが日本語を勉強する姿を観察することができた。勉強の重要性や必要性について意識していない学生の姿は、自分の学生時代と同じであることに気づき、ヒヤリングや暗唱等のプログラムやJLPT(日本語能力試験)の模擬試験など、私が日本語を学んだ時の経験や方法を教えることにした。それらのプログラムを通して、学生は効率的に日本語に取り組み、日本へ留学する決意も引き出せたように思う。また、学生と一緒に、カンボジアの高齢化社会についての調査を行った。幸福感の観点から、インタビューを行い、高齢者支援対策を調べ、HelpAgeカンボジアというNGO組織の担当者と交流した。カンボジアでは家族養老が基本であるが、高齢者の人口は徐々に増加する中で出生率は減少しており、さらに農村部の若者は都市部へ移動するため、高齢者は村に残される傾向がみられる。80%の高齢者はパゴダへと通っている結果を得た。また、パゴダへ通う高齢者の幸福感は圧倒的に高い結果が見られた。パゴダで生活支援を受ける高齢者は、パゴダの掃除や管理などを手伝い、仏教徒として毎日祈りを行う。パゴダは信仰を維持しながら、高齢者間の繋がりを活かす場所でもあると考える。一方、病気になった時、十分に支援がなされていない様子も見られたが、今後の高齢化社会において、パゴダの存在が大きな役割を担うであろう。

松本 梓 Azusa MATSUMOTO (国際協力研究科)

Host	United Nations ESCAP(アジア太平洋経済社会委員会) (タイ)
Period	2017年 7月 30日 - 10月 7日
Objectives	国際機関における研究活動について実務経験を得ると共に、環境分野での政策の国際的な潮流への理解を深める。



国際連合アジア太平洋経済社会委員会(UNESCAP)は世界に5つ存在する国連地域委員会のひとつであり、主にアジアと周辺地域に53の正式加盟国と9の準加盟国を要している。今回のインターンシップ活動では環境開発部門に所属し、主に出版物の執筆やデータ分析、先行研究のとりまとめ、そして国際会議の運営補助等を行った。取り扱う内容は、アジアの各国が抱える廃棄物や温室効果ガスの排出などの環境問題や、持続可能な発展のための都市政策など多岐に及んだ。各国の代表や専門機関が議論を行う国際会議に参加し、議事録作成作業等を通して、国際的な舞台での政策決定の実情や政策研究の重要性を知ると同時に、様々な専門機関で構成される国連システムについての理解を深めることができた。また実務においては、特にデータ取り纏めと管理能力を高く評価して頂き、受入機関へ貢献すると共に、自身が今後伸ばすべき長所として認識することができた。国際的な連携の第一線で活躍する多国籍の国連職員の業務を間近で目にする事で、将来的なキャリアにおける目標がより明確になり、今後取り組むべき課題についても明らかとなった。結論として、今回のインターンシップでは環境政策研究の実務について多くを学び、また自身のキャリア形成の観点からも示唆を得ることができた。この様な機会を与えて下さった広島大学G.ecboプログラム及び指導教授とIDEC開発政策講座に改めて深く感謝したい。



ニーズ調査回答者宅にて



ザアタリキャンプの様子

独立行政法人国際協力機構(JICA) インターンシップ in ヨルダン

Period: 2017年10月15日～12月22日(69日間)

Objectives: JICAが実施する日本の援助と業務について学ぶとともに、難民支援及び緊急援助の現場を経験する

この度2017年度JICAインターンシッププログラムに参加し、JICAヨルダン事務所にてシリア難民向けの支援について調査を行った。ヨルダン北部に位置するザアタリキャンプには約8万人が居住しており、シリア人を対象とした難民キャンプとしては世界最大である。活動は主にJICAの実施した電力研修のモニタリング及び事後評価や、定量的な手法を用いた新規ニーズ調査の実施であった。キャンプ運営組織との交渉や手続きには困難も多くあり、フィールド調査の難しさや学術的理論と実践のギャップを学んだ。調査でキャンプ内の多くの仮設住宅を訪れたが、想像を絶する境遇にも関わらず逞しく暮らす人々に励まされた。深い尊敬の気持ちと共に、より長期的に支援を行いたいと感じた。難民支援や帰還後の復興支援に携わるという目標ができ、キャリアの方向性の面でも示唆を得られた素晴らしい経験となった。

2017年度 帰国レポート / Internship Report

妻 芝允	Jiyun BAE (教育学研究科)	遡上教育インターンシップ(D生対象)
Host	フロリダアトランティック大学 (アメリカ合衆国)	
Period	2017年 10月 24日 - 11月 25日	
Objectives	博士論文のテーマにかかわる指導を受け、その内容を進める、国際学会への参加及び発表をする	



自身の研究テーマは「身体感性論(somaesthetics)」という思想を軸とし教育を批判的に考察する、教育の哲学的研究である。本研修の目的の1つは、身体感性論の創始者であるRichard Shusterman教授の下で勉強すること、2つ目はThe Center for Body, Mind, and Cultureが主催している身体感性論の国際学会へ参加し、発表することであった。身体感性論は世界的に注目されており、教授の著書は15か国以上の言語に翻訳されている。身体感性論は哲学の領域の学問でありながら、伝統的な哲学に比べ、ラジカルで新しい学問である。教授のセミナーを通し、彼の思想がカバーしている哲学や美学の範囲、哲学についての基本的な考え方、受講生(主に文学、芸術専攻)の関心について知ることができ、生きている哲学である身体感性論に直接触れることができる貴重な機会となった。また、教授との個人面談によって、博士論文の指導をうけることができた。国際学会では様々なテーマの研究が発表されたが、そのキーワードの1つは、修行(self-culture)であると言える。私は「韓国歴史における身体感性論の教育の例」をテーマに発表を行った。参加を通して自身の研究を国際的に伝えることの重要性に気づき、自信を得た。

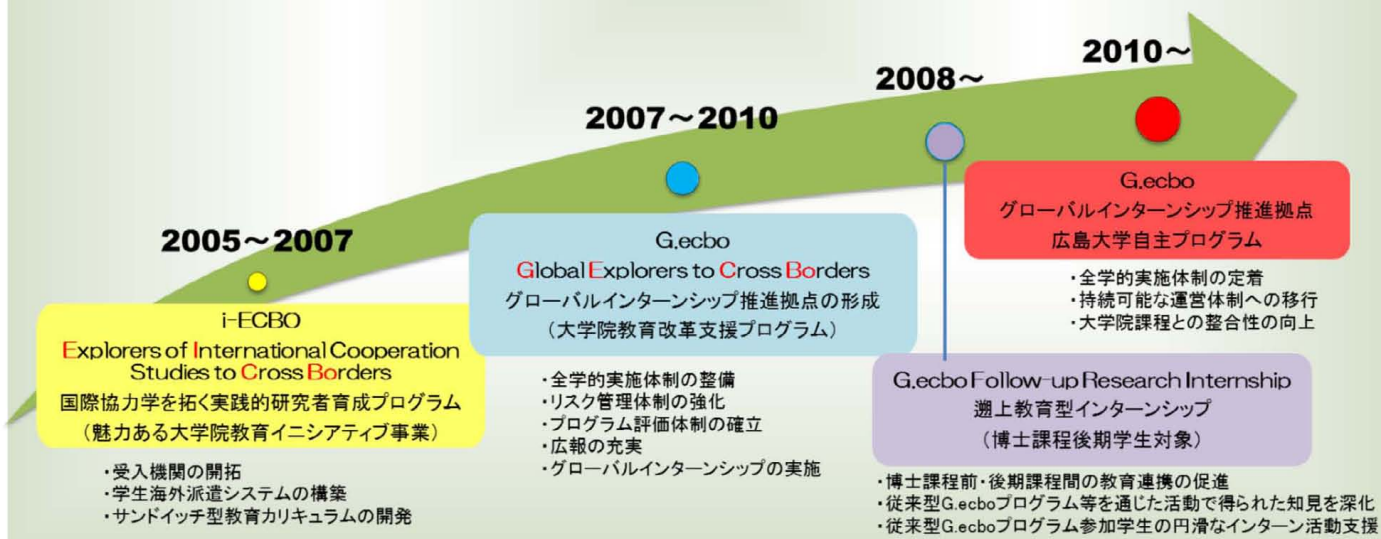
本研修での経験は学問に対する研究者の資質を考え直すきっかけとなった。アメリカは日本に比べて特に自身をアピールすることが求められる。研究者の主な仕事は論文等を通しての表現であることを考えると、研究のどの部分を強調し、どの方法で伝えるか、までの工夫が必要である。研究内容を伝えることが第一の目的であり、言語の流暢さは付随的である。今回の経験を今後の国際的な経験につなげていきたい。

遡上 教育型インターンシップとは?

博士課程後期学生を対象としたプログラムです。従来型G.ecboインターンシップや現地調査等の海外研修に参加経験のある者を、再度研修地域や機関、あるいは妥当と認められた他地域へ派遣します。原則、博士論文の執筆のための調査研究を目的とし、博士課程前期在籍時または博士課程後期在籍初期に得られた知見を、「遡上」プログラムでさらに深化し、実践的研究の高度化をはかります。

■これまでの派遣実績 (2008年にG.ecbo遡上教育プログラム開始から、10名の学生を派遣しました)

2008年度	ザンビア大学(ザンビア共和国)	2名
2009年度	FORWARD(ネパール連邦民主共和国)	1名
2010年度	フィリピン大学国立理数科教育開発研究所(フィリピン共和国)	1名
2012年度	ザンビア大学(ザンビア共和国)	1名
	FORWARD(ネパール連邦民主共和国)	1名
	グリフィス大学(オーストラリア)	1名
2015年度	Solid Waste Management Technical Support Center(ネパール連邦民主共和国)	1名
2016年度	NORSAAC(ガーナ共和国)	1名
2017年度	フロリダアトランティック大学(アメリカ合衆国)	1名



2018年度 RAの紹介

G.ecboプログラムでは、派遣学生の英語コミュニケーション能力とプレゼンテーション能力の向上を目的として、プレゼンテーション研修を派遣前に計3回、帰国後に1回行っています。事前・事後研修を行うことでインターンシップ内容の充実化を図っています。

RAは自らの経験知を後輩へ引き継ぎ、事前・事後研究および海外インターンシップの相談役を務めるなど、プログラムを支えています。



中川 篤(ATSUSHI NAKAGAWA)	教育学研究科 博士課程後期 教育学習科学専攻
MAHAMA TIAH ABDUL-KABIRU	国際協力研究科 博士課程後期 教育文化専攻
曹 蕾 (GAO LEI)	国際協力研究科 博士課程後期 教育文化専攻

2017年度派遣実績 ～夏季派遣9名, 冬期派遣3名の12名の学生を派遣しました。

【冬期追加派遣】	陳 麗蘭 (CHEN LILAN)	教育学研究科	フロリダ州立大学(米国) 派遣
	HUANG QIONG	国際協力研究科	フロリダ州立大学(米国) 派遣
	陳 妍 (CHEN YAN)	国際協力研究科	FORWARD(ネパール) 派遣



2017年度 活動報告

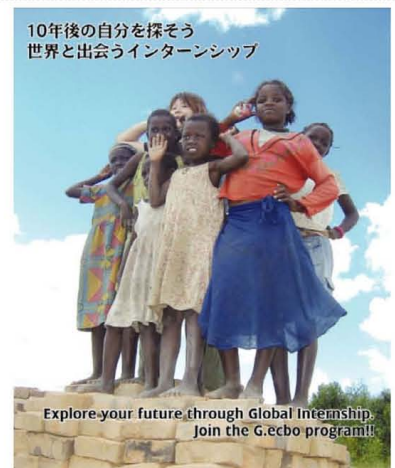
		10月4日	秋期)第3回事前英語プレゼンテーション研修
4月5日	G.ecbo Day (募集説明会)	10月5日	G.ecbo Day (冬期募集説明会)
4月18日	海外インターンシップ公募締切り	10月30日	海外インターンシップ・遡上教育型インターンシップ公募締切り
4月26-28日	選考面接	11月7日	選考面接
5月9日	合同留学体験報告会(発表者: Ayu Lana Nafisyah さん)	11月15日	帰国報告会(1)
5月22日	合格者向け英語プレゼンテーションガイダンス	11月16日	合格者向け英語プレゼンテーションガイダンス
5月29-31日	夏期)第1回事前英語プレゼンテーション研修	11月28日	冬期)第1回事前英語プレゼンテーション研修
6月27-28日	夏期)第2回事前英語プレゼンテーション研修	12月20日	冬期)第2回事前英語プレゼンテーション研修
6月30日	海外渡航リスク管理セミナー	1月5日	冬期)第3回事前英語プレゼンテーション研修
7月21日	広島大学教育研究支援財団助成金決定通知書授与式	1月10日	冬期派遣生インターンシップ開始
7月24-26日	夏期)第3回事前英語プレゼンテーション研修	1月22-31日	帰国報告会(2)(3)
7月下旬	夏期派遣生インターンシップ開始	2月14日	広島大学教育研究支援財団研究助成金等成果報告会
9月29日	平成29年度第1回G.ecboプログラム運営委員会	3月13日	平成29年度第2回G.ecboプログラム運営委員会

2018年度G.ecbo海外インターンシップの募集は4月から開始します！
派遣先等の詳細はHPをご覧ください。

G.ecbo will call for 2018 participation in April! Go to our website for the list of intern locations and further details.

事務局編集後記

このプログラムに携わり7年が経とうとしていますが、海外インターンシップが当たり前になりつつあることを実感しています。「海外インターンシップ」といっても多種多様で、今年度は特に多くの問い合わせを受けながら、G.ecboの特色がより濃く見えた年でもありました。G.ecboは問題発見・解決型のプログラムのため、事前研修を通し段階的に活動計画を立てていきます。自身で派遣先と調整を行い、教員の指導を受けながら、渡航前に必死で考え悩みます。もしかすると、インターンシップ中よりも渡航準備の方がつらい学生もいるかもしれませんが、この準備があるからこそ、海外で予想外の出来事に直面した場合でも目的を見失わず、前向きに取り組む力となります。頼もしく成長し、顔つきを変えて帰国してくる彼らをうらやましくも誇らしく感じながら、今年もこのNewsletterをまとめました。体験談を是非ご覧ください。2018年度もたくさんのご応募をお待ちしております！



Global Explorers to Cross Borders
G.ecbo



広島大学 学生プラザ
グローバルキャリアデザインセンター内
G.ecboプログラム事務局

Email: gecbo@hiroshima-u.ac.jp
https://www.hiroshima-u.ac.jp/gecbo